
刑法改正の影響とその評価、性犯罪被害者の鑑定における課題等

武蔵野大学 教授 心理臨床センター長

小西聖子

刑法改正の影響とその評価、性犯罪被害者の鑑定における課題等

お話、検討したい内容

- 支援の領域での刑法改正の影響とその評価
- 性犯罪被害者の精神鑑定事例に見る被害者の心理、行動評価と司法における評価
 - 1) 事例1: 被害を受けた人の被害時、被害後の反応
 - 2) 事例2: 加害者の認識とは？

どのような変化が起きて
いるか

支援の領域で の刑法改正の 影響とその評価

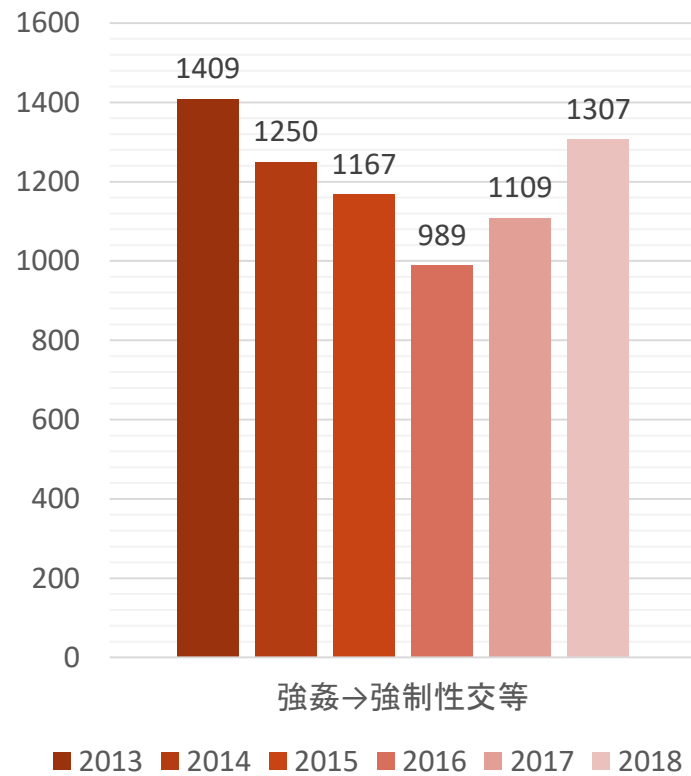
「平成30年版犯罪白書の概要」 から

- 強制性交等 認知件数 1,109件（前年(強姦)比 12.1%増）うち男性が被害者 15件
- 平成16年以降減少傾向にあったが29年は増加
- 強制わいせつ 認知件数 5,809件（前年比6.1%減）うち男性が被害者 200件
- 平成22年から増加傾向にあったが26年から減少
- 監護者性交等(平成29年新設) 認知件数 16件
- 監護者わいせつ(平成29年新設) 認知件数 18件

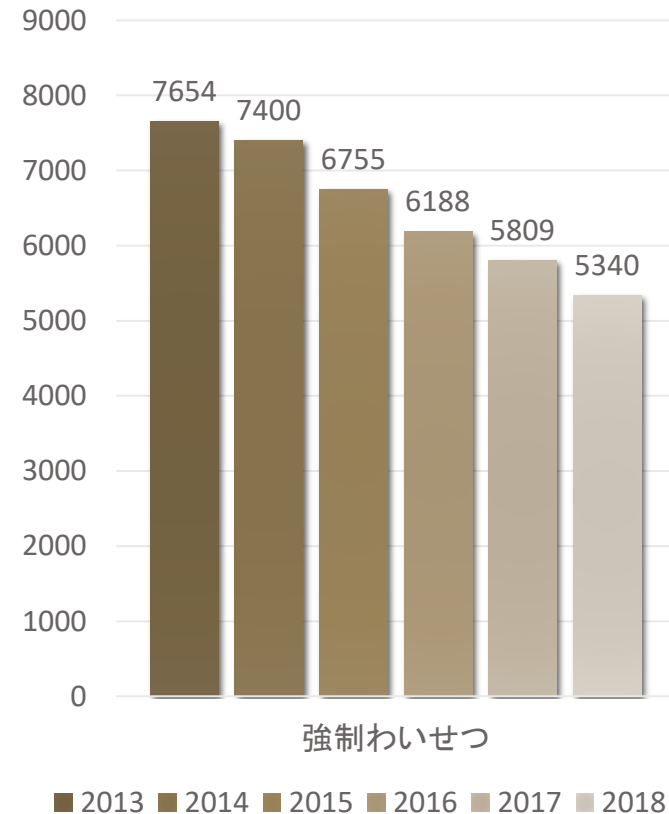
性犯罪認知件数

(平成25年から29年については犯罪白書、平成30年1月から12月については政府統計e-Stat中 犯罪統計 平成30年1～12月犯罪統計【確定値】 訂正版)

強姦→強制性交等



強制わいせつ

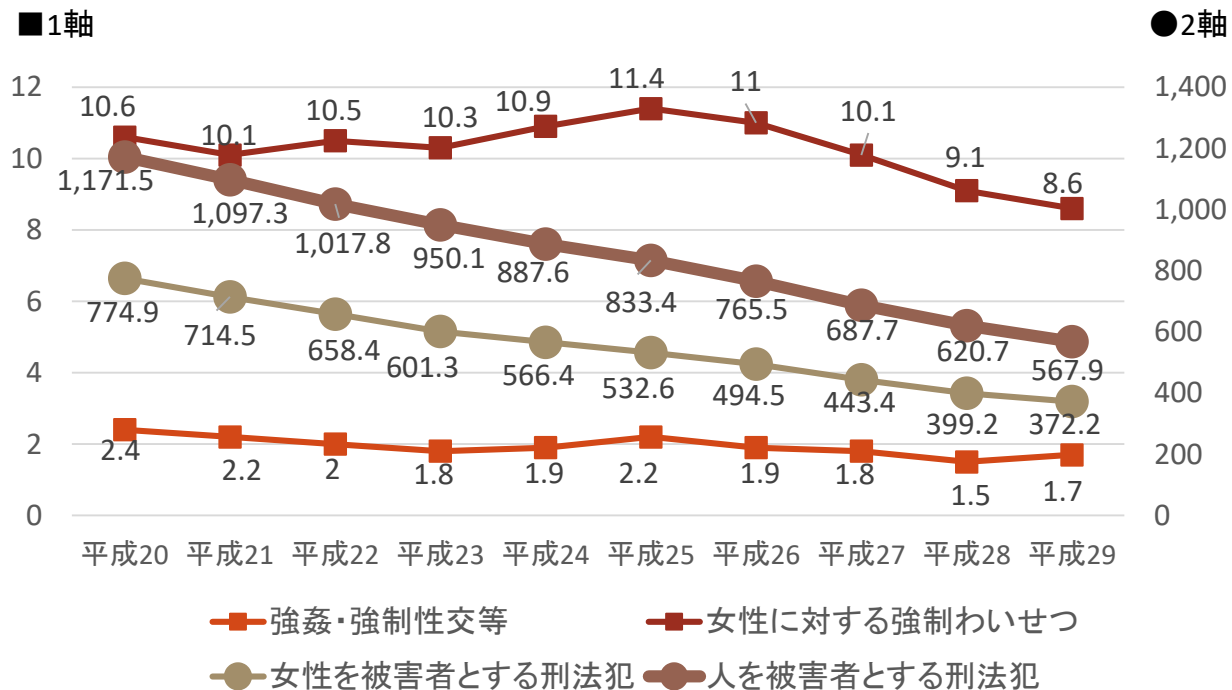


※平成29年における男性被害者15件
監護者性交等の認知件数は16件

人が被害者となった刑法犯 被害発生率とその変化

人口10万単位の発生率推移

性犯罪被害(1軸)、人が被害者となった刑法犯(2軸)



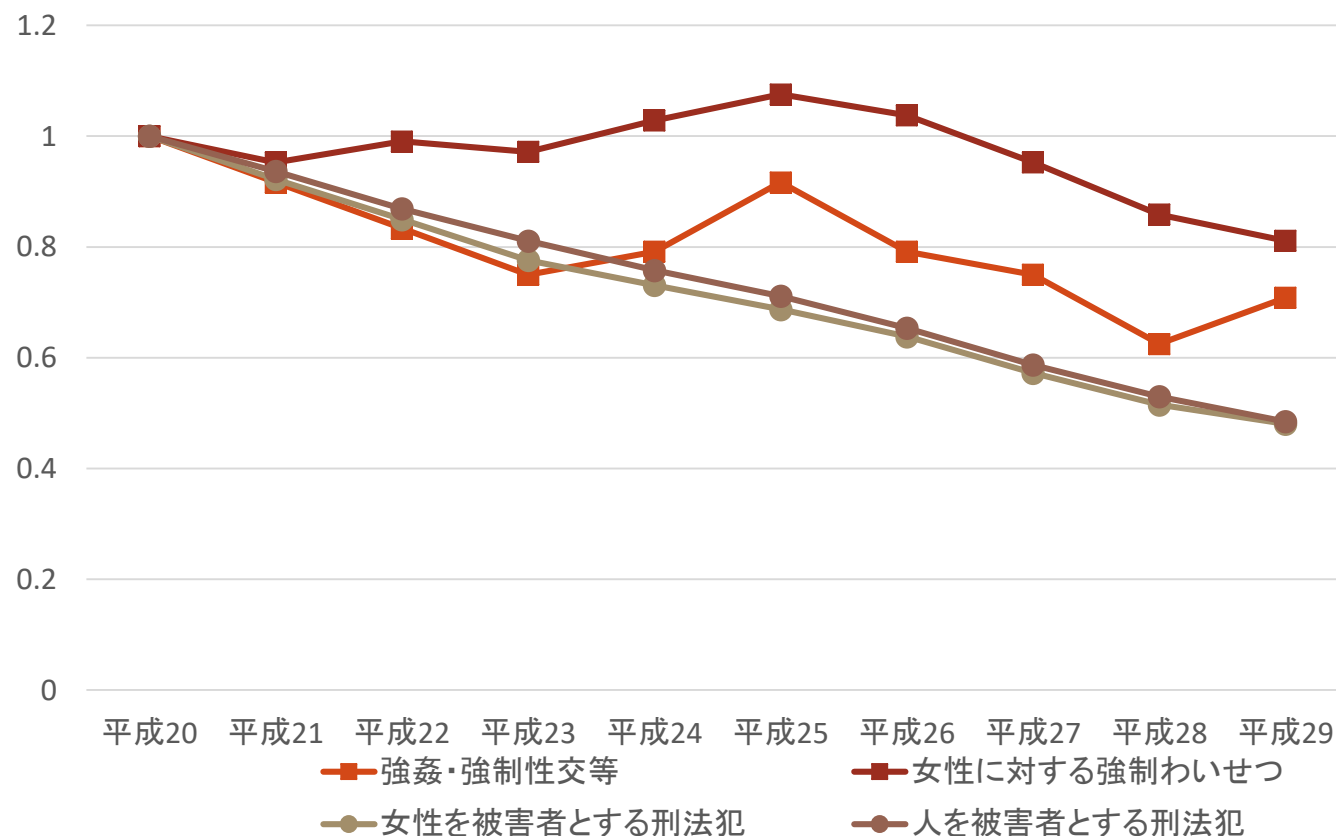
平成30年度版犯罪白書:人が被害者となった刑法犯の認知件数及び男女別の被害発生率のデータ(表6-1-3-1)及び図6-1-1-1に基づいて計算。
http://hakusyo1.moj.go.jp/jp/65/nfm/n65_2_6_1_3_0.html

平成20年から平成28年は強姦、平成29年からは強制性交等罪(女性被害者)の統計に変更

女性を被害者とする刑法犯及び強姦、強制性交等、強制わいせつは女性被害者データのみ

■ 性犯罪被害発生率については1軸目盛
 ● 刑法犯認知件数発生率については2軸目盛を参照

人が被害者となった刑法犯 被害発生率(犯罪白書)の比率変化(平成20年度を1とした数値)

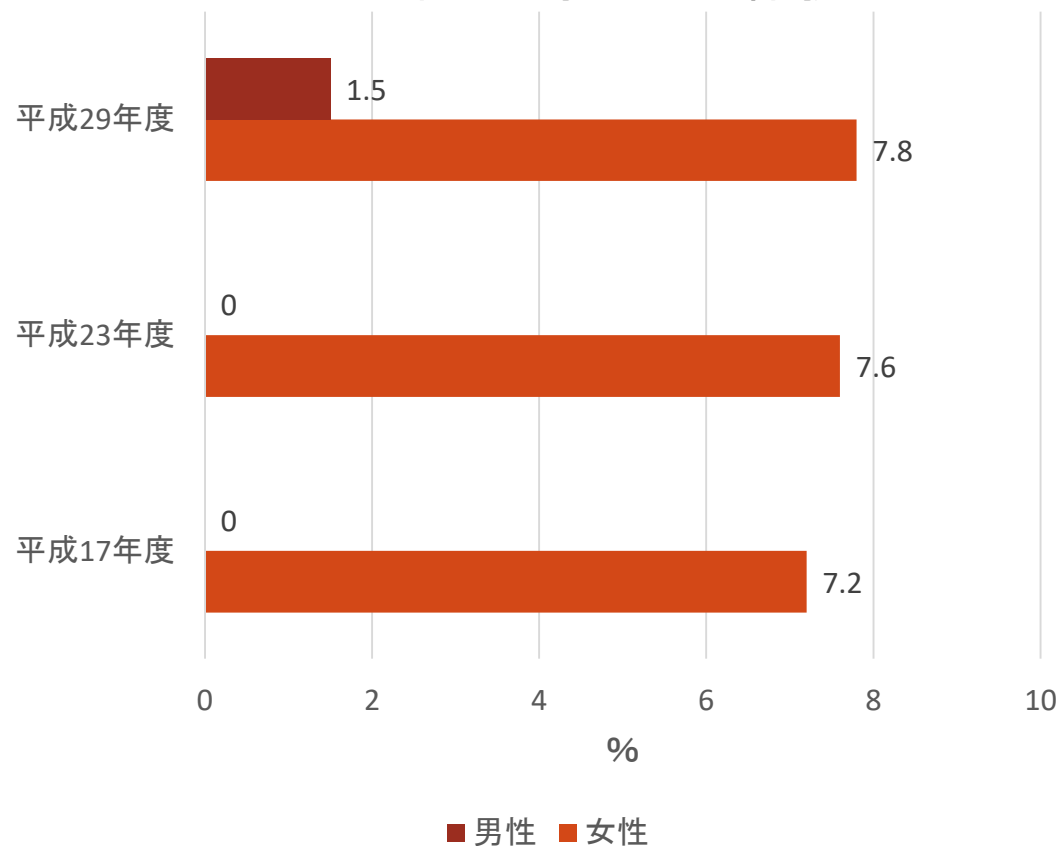


平成30年度版犯罪白書: 人が被害者となった刑法犯の認知件数及び男女別の被害発生率のデータ(表6-1-3-1)及び図6-1-1-1に基づいて計算。
http://hakusyo1.moj.go.jp/jp/65/nfm/n65_2_6_1_3_0.html

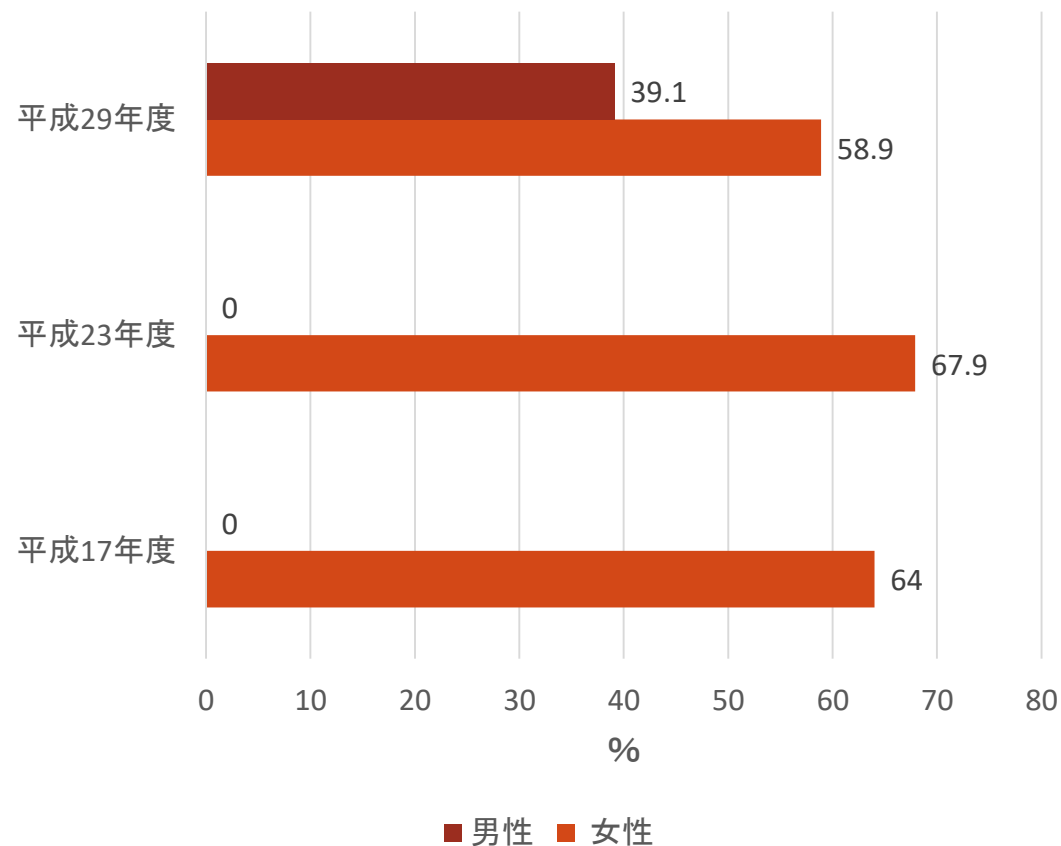
女性を被害者とする刑法犯及び強姦、強制性交等、強制わいせつは女性被害者データのみ

内閣府男女間の暴力に関する調査

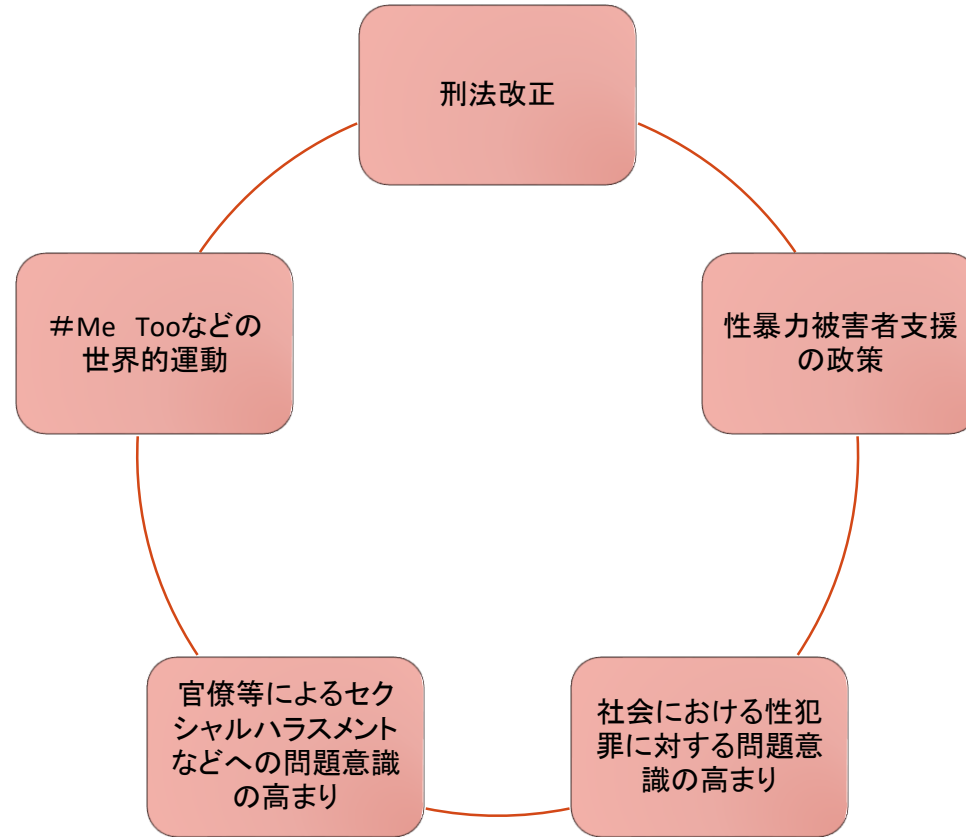
無理やり性交(等)された体験



誰にも相談しなかった人の割合



より広範な影響



SARC東京ホットラインに寄せられた子どもに対する性暴力実態 (2018年4月～2019年3月)

	13歳未満		13～17歳		18～19歳		その他		合計	
実人数	29		88		73		7		197	
性別	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男
強制性交等	2	1	40	5	37	1	5	0	84	7
強制わいせつ	10	3	16	0	11	2	2	0	39	5
監護者による強制性交等	7	1	13	1	7	2	0	0	27	4
監護者による強制わいせつ	4	0	0	1	0	0			4	1
デジタル性暴力	1	0	4	0	3	0			8	0
痴漢	0	0	3	0	3	0			6	0
ストーカー	0	0	2	0	1	0			3	0
デートDV	0	0	1	0	4	0			5	
その他	0	0	2	0	2	0			4	0
計	24	5	81	7	68	5	7	0	180	17

SARC東京ホットラインに寄せられた相談者別実態

平川理事長提供

(2018年4～2019年3月)

	13歳未満		13～17歳		18～19歳		その他		計	
実人数	29		88		73		7		197	
性別	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男
本人	0	0	34	6	36	3	1	0	71	9
母親	20	0	18	0	23	0	0	0	61	0
父親	0	3	0	5	0	2	0	2	0	12
祖父母・叔母等親戚	3	0	2	0	0	0			5	0
友人・先輩	0	0	9	1	2	0			11	1
交際相手	0	0	0	3	2	0		1	2	4
知人	1	1	1	3	0	0			2	4
関係機関	1	0	6	0	4	0	2	1	13	1
不明	0	0	0	0	1	0			1	0
計	25	4	70	18	68	5	3	4	166	31

英語文献における性被害時の被害者の態度 (山本、未発表)

PsycINFO、PubMedで時期を限定せず、(rape or sexual assault or sexual violence) AND (resistance or resisting or refusal) AND (response or reaction or behavior), で検索

査読のある実証研究のうち目的に合う論文26件の結果では、

- 抵抗が外見上明確な行動よりも消極的な抵抗行動の方が被害者に共通してみられやすい。もがく、避ける、払いのける、泣く、加害者を説得する、やめるように言う、懇願する、交渉する
- 積極的な行動をとらない人、または「凍り付いた」「何もしなかった」人はどの調査にも必ずいる。18%-69%

事例1：被害を受けた人の被害時、被害後の反応

事例2：加害者の認識とは？

性犯罪被害者の精神 鑑定事例に見る 被害者の心理、行動 と司法における評価

筆者の被害者に係る鑑定歴

2006年から現在までに 69件(医療の情報のみで書いた患者の意見書は除く・証人尋問等含む)

- 刑事48件
- 民事21件

- 意見書鑑定書等 50

- 警察検察から委嘱 35
- 裁判所から委嘱 18
- 指定弁護士、当事者(原告、被告)から委嘱 16

事例1

見知らぬ加害者が部屋に入ってきた直後に、全く体が動かなかった事例

1. 事件

被疑事実 強制性交等

2. 本意見書における検討事項

被害女性が、意思に反した性交を要求されながら、抵抗することなく性交に応じてしまうようになった心理状況とその理由

Tonic Immobility(動物学では「擬死」)

進化的に各種の動物にみられる反射の一つである。最近、TIの反応は、人間にも起こる、と考えられるようになった。PTSDの患者の再体験時などの体の反応が研究されている。

Tonic immobility (TI) は、避けることのできない危険に対する意思とはかかわりなく生じる反応である (involuntary reflexive reaction)。特徴として、一時的な広範な運動抑制と外的な刺激に対する相対的無反応が見られる。(Ratner, 1967).

PTSD患者とそうでない人に、脅威刺激を与える実験ではPTSD患者には特に明らかな身体のTIが見られたという。体の揺れの減少、頻脈と心拍数の減少など。(Volchan et al., 2011, 2017). TIの大きさはPTSDと関連するという研究もある。(Fiszman et al., 2008; Rocha-Rego et al., 2009; Lima et al., 2010; Portugal et al., 2012; Maia et al., 2015; Kleine et al., 2018).

Tonic immobilityの反応+感情麻痺

本件の被害者の行動の分かりづらさは、この二つの概念で説明できる。

事例2

優越的地位にある加害者に、ラブホテルに強引にいっしょに連れ込まれ、性交されたが、拒否できず、後でPTSDを残した例。

1. 事件

被疑事実 準強姦

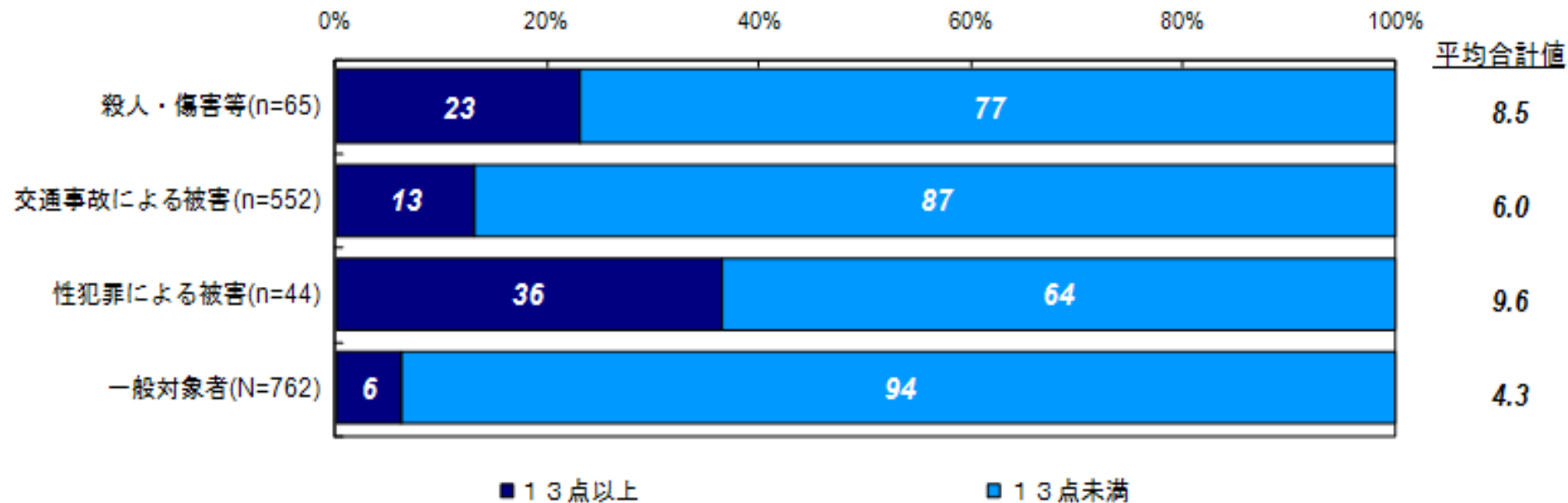
2. 鑑定事項

1 加害者と被害者が面識があり、かつ、加害者が被害者に対し優越的地位(上司、先生等)にある場合の女性の性暴力被害者の被害時及び被害後の反応、行動並びに心理状態はどのようなものか。

2 本件被害者が被害時、心理的・精神的に抵抗できないか、また抵抗することが著しく困難な状態にあったと認められるか。

事例2の資料：被害者の現在（過去30日間）の精神健康状態について

【K6による】 平成20年度犯罪被害類型別継続調査 調査結果報告書（平成21年3月）より



※対象者の被害からの経過年数は、殺人・傷害等で平均54.2か月（約4年6か月）、交通事故による被害で50.7か月（4年3か月）、性犯罪による被害で平均41.2か月（約3年5か月）である。K6の合計値が13点以上の場合、「重症精神障害相当」とされている。

事例2の資料:加害者との面識の有無×異性から無理やりに性交された被害にあった時期クロス表

e-Stat統計表一覧「平成23年度男女間における暴力に関する調査集計結果統計表」

<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/GL02020101.do?method=xlsDownload&fileId=000006172797&releaseCount=1> より抜粋

問23 加害者との面識の有無	問25 異性から無理やりに性交された被害にあった時期					20歳代	30歳代	40歳代	50歳代以上	無回答
	全体	小学校入学前	小学生のとき	中学生のとき	中学卒業から19歳まで					
全体	134	4	14	7	27	47	19	4	6	6
まったく知らない人	23	1	6	2	7	5	1	-	-	1
面識あり(計)	103	3	8	5	20	41	16	4	5	1
顔見知り程度の人	20	1	-	1	7	10	1	-	-	-
よく知っている人	83	2	8	4	13	31	15	4	5	1
無回答	8	-	-	-	-	1	2	-	1	4

被害時期が未成年時 38.8%(134人中52人)
 知人から被害 76.9%(134人中103人)
 未成年時知人から被害 69.2%(52人中36人)

TI+解離+背景に関係性の問題

被害者と加害者の関係性とパワーによるコントロールの問題

繰り返しの被害ではカギとなる概念

抵抗できず、性的虐待などでは、表面的には「進んで」行われることもある(そうしたいわけではない)

当初は、自責感が強く、治療に抵抗することもある。

家族内の問題では、通報できないことが多い。